

考古からのアソシエーション

群馬大学教育学部教授 森田 悌

群馬大学の森田と申します。文献や文字を相手に研究することが私の商売です。今日のお話のような考古のことは日頃やっていないので、講評のようなことをお願いされましたが、がらではございませぬ。ただ今日の話をお話のうかがっておりますと私も納得するところがありまして、それについて若干考えましたことを述べて、責任を果たしたいと思っております。

私の扱っている、文献・文字資料が残されております弥生時代の終わりあたりから古墳時代以降では、稲作がまずは泉のそばや泉の下流の水の豊富なところで展開していったという話を先程うかがったわけですが、似たような話が文献の中にも出てきます。「常陸国風土記」という文献がありますが、その中にしばしば開発関係の話をするときに引用される物語で、常陸国行方郡で継体天皇の時に谷の西の方の芦原を切り開いて、そこを水田にしたという話があります。この行方郡の開発が「常陸国風土記」では初期のものとして書かれているのです。ちょうどそれが今日のお話の、あまり人工を加えない灌漑による水田のあり方とぴったり符号しているので、興味深く思ったわけです。この継体天皇は6世紀の初めあたりの天皇と考えて良いと私は思っています。5世紀は倭五王の時代で、6世紀の最初に位置づけられる天皇が継体天皇ということになります。

次に私が感心し面白いと思いましたが、井戸を掘ったり、遠くから水を引いてきて灌漑をするという話が出てきたことです。これにつきましても「常陸国風土記」の中に、同様に灌漑のため人工的に水を得る作業を進めるようになっていっていることがうかがえるのです。具体的には「常陸国風土記」では、みぶのむらじまろ壬生連磨という人が小さな谷の谷頭に堰を築き、そこを池にして水を溜め、水田を開発したという記事があります。同じ行方郡の記事なんですけども、645年の大化改新の政変が起きて退位した皇極天皇に代

わって即位する孝徳天皇がいますが、その天皇の頃のことです。これもちょうど群馬の例に符合するように思われますね。今日発表のあった群馬の事例と「常陸国風土記」の行方郡の事例が時代的に平行しているかどうかということになりますと、問題が少なくありませんが、展開の仕方という観点からみますと、同様のパターンとなっていると思います。

さて、私どもが文献を通じて律令時代の灌漑の事を調べますと、大規模な開発の話が出てきます。律令時代になりますと中央集権体制をとり、朝廷を中心にしまして地方に国・郡・里というような制度を作って、人々の力を国家目的に向けて一挙に動員出来るようにしたわけです。そういう体制下でもって大規模な開発が行われております。具体的な例を挙げますと8世紀の中頃、福井県におきまして北陸荘園と呼ばれる荘園が次々に造られるようになります。そこでは非常に大規模な溝を造って大きな川から水を引き、灌漑しています。代表的な例としては今のちょうど福井市の西部にみちのりのしょう道守荘という荘園が作られます。この道守荘に対する水の供給は驚くことに、5～6キロメートルにわたる長大な溝を造って行っております。その溝は断面が逆台形で、上の方の幅が1丈2尺つまり3.6メートル、深さは5尺、1.5メートルにもなります。その規模であすわ足羽川という川から水を引いてくるのです。そういったことを考えあわせながら、古くから新田堀用水の前身になるようなものがあつたのではないかという今日の話しを、興味深く伺いました。新田堀用水については古代の段階のものであるとか、平安朝の終りあたり中世になってから造られたものであるとか色々議論があることを伺いましたが、私は北陸荘園の例などから新田堀用水を必ずしも中世以降のものとする必要はなく、奈良・平安朝の段階に造られたとみても、不自然ではないという印象をもったわけです。また「続日本記」を読んでいきますとけぬがわ「毛野川」という名で鬼怒川が出てきますが、洪水が起きないようにこの川の流れを変える工事を始めたという話があります。そういうことから新田堀の前身にな